

第 3 章

子どもの学力・習い事・進路

樋田 大二郎



# 1. 学力観・勉強観

「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観は根強く残っているが、子どもに高学歴を希望する母親では弱まっている。子どもの性別では、女子の母親で「ほどほどで満足」的な傾向が強い。また、高学歴の母親は非高学歴の母親よりも、学力志向・成績志向が強く、「ほどほどで満足」の傾向が弱い。

## 弱まる「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観

最近のマスコミは学力低下を憂える論調が多いが、今回の調査では、5割弱の母親が「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」、3割の母親が「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」、4分の1の母親が「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」と答えている。母親の間では「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観が根強い（表3-1）。しかしながら、そうした「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観は、この4年間で大きく減少の傾向を示している。図3-1にあるように、「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」が11.6ポイントの減少、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」が6.5ポイントの減少、「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」が6.2ポイントの減少となっている。

## 女子に対して「ほどほどで満足」的な傾向

同じく表3-1で、学力観・勉強観には性差があった。「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」は女子が50.7%、男子は45.3%。また、「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」は女子27.2%に対し、男子22.8%と、いずれも女子のほうが5ポイントほど高い値であった。反対に「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」は女子13.8%に対して男子23.0%で、男子のほうが9.2ポイント上回っ

ていた。女子に対する学力観・勉強観のほうが男子に対するそれよりも「ほどほどで満足」的な傾向がみとれる。学年段階別でみると、「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観は学年とともに弱まっていく傾向にある。

## 子どもに高等教育進学を希望する母親で「ほどほどで満足」的な傾向が減少

表3-2は「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」の2つの項目に焦点をあて、進学希望段階別に学力観・勉強観の変化をみたものである。まず、「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」は、子どもに対して高等教育進学を希望しない母親（「高校まで」「専門学校・各種学校まで」を選択）の間では、この4年間であまり変化がない。これに対して、高等教育進学を希望する母親では「短期大学まで」が16.9ポイント、「四年制大学まで」が13.9ポイント、「大学院まで」が15.2ポイントとそれぞれ大きな減少があった。また、「どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい」は、高等教育進学を希望しない母親の間でも減少しているが、「短期大学まで」で3.7ポイント、「四年制大学まで」で8.4ポイント、「大学院まで」で7.1ポイントと、高等教育進学希望者の中で大きく減少している。

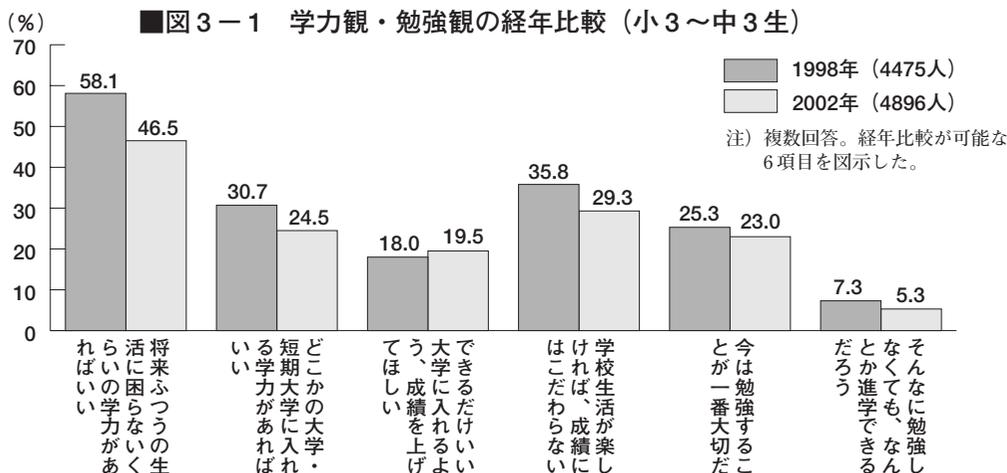
上述の「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観の弱まり（加えて学力志向・学歴志向の高まり）は、子どもに対して高学歴を望む母親の意識変化によって引き起こされたものである。

■表3-1 学力観・勉強観(性別・学年段階別)

(%)

	全体 (6085人)	性別		学年段階別			
		男子 (3129人)	女子 (2948人)	小学校 低学年 (1187人)	小学校 中学年 (1185人)	小学校 高学年 (1207人)	中学生 (2504人)
将来ふつ々の生活に困らないくらいの 学力があればいい	47.9	45.3	50.7	53.4	50.4	48.5	43.8
どこかの大学・短期大学に入れる学力が あればいい	24.9	22.8	27.2	26.6	27.0	26.3	22.4
できるだけいい大学に入れるよう、成績を 上げてほしい	18.6	23.0	13.8	14.8	14.3	16.3	23.5
学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない	30.7	29.1	32.5	36.6	36.5	34.6	23.3
今は勉強することが一番大切だ	20.9	20.3	21.5	12.2	13.9	18.8	29.3
そんなに勉強しなくても、なんとか進学 できるだろう	5.4	5.3	5.6	5.9	5.1	7.1	4.6
いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある	17.6	18.9	16.2	18.3	18.1	20.9	15.4
子どもの学習上の苦手は親として正確に 知っておきたい	41.1	43.3	38.8	51.8	47.2	41.8	32.8
高学歴よりも資格を身につけるほうが将来 役に立つ	43.1	40.8	45.6	41.2	44.2	42.8	43.7
実際の場で話せる英語力は必要だ	62.4	64.1	60.8	58.7	59.1	61.1	66.4

注) 複数回答。



■表3-2 学力観・勉強観の経年比較(進学希望段階別)

(%)

		進学希望段階						全体
		高校まで	専門学校・ 各種学校 まで	短期大学 まで	四年制大学 まで	大学院 まで	その他	
	1998年	469人	491人	315人	2384人	163人	379人	4475人
	2002年	438人	614人	266人	2523人	215人	350人	4896人
将来ふつ々の生活に困らない くらいの学力があればいい	1998年	91.0	82.1	69.5	45.4	31.9	66.2	58.1
	2002年	87.4	78.8	52.6	31.5	16.7	57.4	46.5
どこかの大学・短期大学に 入れる学力があればいい	1998年	3.2	17.7	53.3	39.9	14.1	14.2	30.7
	2002年	1.6	13.2	49.6	31.5	7.0	10.0	24.5

注1) サンプルは小3~中3生。

注2) 進学希望段階別については、1998年調査から無答不明(273人)、「中学校まで」(1人)を、2002年調査についても無答不明(485人)、「中学校まで」(5人)を、それぞれ表から省いているが、全体ではそれらの数値も含めている。

注3) 複数回答。10項目中2項目を表示した。

## 高学歴の母親で弱い「ほどほどで満足」的な学力観・勉強観

母親がどのような学歴をもっているかが、学力観・勉強観に強い影響を与えていることが分かった(表3-3)。「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」は非高学歴(非大卒・非短大卒)の母親が61.1%に対して、高学歴(大卒・短大卒)の母親はおよそ半分の31.1%。また「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない」も非高学歴者36.8%に対し、高学歴者23.0%となっている。非高学歴者のほうが学力や成績にこだわらない傾向がある。これに対して「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」は高学歴者26.8%に対し、非高学歴者12.1%である。「今は勉強することが一番大切だ」も高学歴者23.9%に対し、非高学歴者18.5%である。高学歴者は非高学歴者よりも、子どもが勉強することや成績を上げていい大学に入ることを大事に考えている。

その他「いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある」「子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい」「実際の場面で話せる英語力は必要だ」は高学歴者のほうが大切に考え、「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」は非高学歴者のほうが大切に考えている。

## 学年が上がるにつれて強まる学力志向・成績志向

最後に、表3-4で子どもの学年段階別および学年段階×成績別に母親の学力観・

勉強観をみてみよう。まず、全体からみると、学年が上がるにつれて「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」が減少し、逆に「今は勉強することが一番大切だ」が増加する。学年が上がるにつれて学力志向・勉強志向が強くなることが分かる。また、「学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない」は小学校から中学校に進学すると減少し、逆に「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」が中学校に進学すると増加する。成績志向・学歴志向は中学生の母親で強くなっている。

学年段階×成績別にみると、学年が上がるにつれて成績上位者と下位者の母親の学力観・勉強観の差異が広がる。「将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」は小学校低学年でも成績上位者43.1%に対して下位者66.7%と、その差は大きい。しかし、中学生ではさらに差が広がり、32.6ポイント差の27.9%対60.5%となっている。一方、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」では、成績上位者ほど選択する者が多い傾向がみられる。また、資格志向については「高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ」が小学校低学年では成績上位者のほうが下位者よりも6.5ポイント高かったのが、中学生では逆転して下位者のほうが18.4ポイントも高くなっている。学年が上がるにつれて、成績上位者の母親は下位者の母親よりも学力志向・成績志向が強まり資格志向が弱まる。

■表3-3 学力観・勉強観（母親の学歴別）

（％）

	全体 (6085人)	母親学歴別	
		非大卒・非短大卒 (3401人)	大卒・短大卒 (2684人)
将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい	47.9	61.1	31.1
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	24.9	22.7	27.7
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい	18.6	12.1	26.8
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	30.7	36.8	23.0
今は勉強することが一番大切だ	20.9	18.5	23.9
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	5.4	5.5	5.4
いい学校に入れるには塾に通わせる必要がある	17.6	13.2	23.1
子どもの学習上の苦手は親として正確に知っておきたい	41.1	37.3	45.8
高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ	43.1	49.6	34.9
実際の場面で話せる英語力は必要だ	62.4	56.4	70.0

注) 複数回答。

■表3-4 学力観・勉強観（学年段階×成績別）

（％）

		成績			全体
		上位	中位	下位	
将来ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい	小学校低学年	43.1	55.9	66.7	53.4
	小学校中学年	33.6	60.2	69.0	50.4
	小学校高学年	34.8	55.2	71.6	48.5
	中学生	27.9	50.5	60.5	43.8
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	小学校低学年	27.1	30.5	19.4	26.6
	小学校中学年	25.2	30.3	21.8	27.0
	小学校高学年	23.6	27.4	27.7	26.3
	中学生	20.2	29.1	19.1	22.4
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい	小学校低学年	20.0	12.2	11.6	14.8
	小学校中学年	19.4	11.0	10.6	14.3
	小学校高学年	22.7	12.3	7.1	16.3
	中学生	32.5	18.1	16.1	23.5
学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない	小学校低学年	29.2	36.9	49.6	36.6
	小学校中学年	26.5	41.5	48.6	36.5
	小学校高学年	26.3	39.0	47.7	34.6
	中学生	16.9	27.2	28.8	23.3
今は勉強することが一番大切だ	小学校低学年	15.4	12.0	10.9	12.2
	小学校中学年	15.7	11.4	16.9	13.9
	小学校高学年	23.1	13.6	21.3	18.8
	中学生	31.5	28.7	27.4	29.3
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	小学校低学年	6.2	6.9	3.1	5.9
	小学校中学年	5.3	6.4	2.1	5.1
	小学校高学年	7.8	8.0	2.6	7.1
	中学生	4.9	5.5	3.3	4.6
高学歴よりも資格を身につけるほうが将来役に立つ	小学校低学年	40.6	42.9	34.1	41.2
	小学校中学年	41.3	46.7	45.8	44.2
	小学校高学年	37.2	48.7	42.6	42.8
	中学生	34.3	49.0	52.7	43.7

注1) サンプルは、小学校低学年 1187人、小学校中学年 1185人、小学校高学年 1207人、中学生 2504人。

注2) 複数回答。10項目中7項目を表示した。

注3) 子どもの学校の成績は、「上のほう」「真ん中より上」を成績上位、「真ん中くらい」を成績中位、「真ん中より下」「下のほう」を成績下位とした。「全体」には成績不明の者も含まれる。

## 2. 進学期待

四年制大学希望者が5割、短期大学と大学院を加えると合計6割が高等教育進学を期待している。進学期待は性差が大きく、大学・大学院への進学期待は男子が67.3%に対して女子は42.9%でしかない。保護者の学歴、職業といった家庭的背景による進学期待の差も大きい。

日本は外国と比べると学歴社会であり、高学歴をもつ者は就職やその後の昇進で有利だとされている。わが国で学歴社会が社会的に許容される理由の1つは、学習と学歴取得の機会が比較的平等に保障されているからである。しかし、今回の調査では、学習と学歴取得に強く影響を与えると思われる母親の進学期待に性差、地域差、家庭的背景による差が存在することが明らかとなった。近年、学校は「自己責任」の論理や「規制緩和」の論理を持ち出して、さまざまな側面で教育指導を縮小・整理する傾向がある。しかしながら、そうした縮小・整理は家庭や地域の影響力を増し、子どもたちが十分かつ平等な教育を受ける機会を損ねることになる。

### 強い高学歴期待、しかし女子には男子よりも低い期待

表3-5はどの段階までの教育を受けさせたいか進学期待をたずねた結果である。「四年制大学まで」教育を受けさせたいとする母親が51.2%、これに「短期大学まで」5.9%と「大学院まで」4.3%を合わせると合計61.4%の母親が子どもに高等教育を受けさせたいとしている。「中学校まで」もしくは「高校まで」と考えている母親は合計で9.3%だけであった。

性別でみると、「中学校まで」「高校まで」と考える母親は男女ともにおよそ1割弱であった。しかし、「四年制大学まで」または「大学院まで」を希望している割合は、男子は67.3%、およそ3分の2に達しているのに対して女子は42.9%と4割強にとどまってい

る。女子の場合、「専門学校・各種学校まで」と「短期大学まで」が合計で27.6%と多くなっている。母親の進学期待は明らかに男子のほうが高い段階を望んでいる。

### 大きな進学期待の地域差

次に、地域ごとの進学期待の違いを表3-6を用いて考える。「中学校まで」「高校まで」と答えた割合が郡部では19.2%と首都圏や地方都市のおよそ2倍の値になっている。また、「四年制大学まで」「大学院まで」に着目すると、首都圏が55.5%に対して地方都市はそれより5.7ポイント少ない49.8%、郡部ではさらに16.5ポイント少ない33.3%しかない。進学期待の地域差は非常に大きい。

### 家庭的背景によって進学期待に大きな差

次に、母親と父親の学歴および父親の職業と進学期待の関係をみてみよう。表3-7で、子どもに「四年制大学まで」「大学院まで」を希望する割合は、母親が高学歴者(大卒・短大卒)の場合は73.4%とおよそ4分の3に達している。しかしながら母親が非高学歴者(非大卒・非短大卒)の場合は32.0ポイントも低い41.4%にとどまっている。父親の学歴と進学期待の間にも同様な傾向がみられる。

父親の職業と進学期待の間には、ホワイトカラーの家庭の69.6%が「四年制大学まで」「大学院まで」を希望しているのに対してブルーカラーではそれよりも30.0ポイント少ない39.6%でしかない。保護者の学歴や職業と進学期待との間にも強い相関がある。

■表3-5 進学期待(性別)

(%)

	全体 (6085人)	男子 (3129人)	女子 (2948人)
中学校まで	0.1	0.2	0.0
高校まで	9.2	8.8	9.6
専門学校・各種学校まで	12.2	8.7	15.8
短期大学まで	5.9	0.4	11.8
四年制大学まで	51.2	61.6	40.2
大学院まで	4.3	5.7	2.7
その他	7.3	6.5	8.2
無答不明	9.8	8.2	11.6

注)「全体」には性別不明の者も含む。

■表3-6 進学期待(地域別)

(%)

	首都圏 (6085人)	地方都市 (1438人)	郡部 (1518人)
中学校まで+高校まで	9.3	10.0	19.2
専門学校・各種学校まで+短期大学まで	18.1	23.0	33.4
四年制大学まで+大学院まで	55.5	49.8	33.3
その他	7.3	7.8	5.9
無答不明	9.8	9.5	8.2

■表3-7 進学期待(保護者学歴別・職業別)

(%)

	全体 (6085人)	母親学歴別		父親学歴別		父親職業別		
		非大卒・ 非短大卒 (3401人)	大卒・ 短大卒 (2684人)	非大卒・ 非短大卒 (2950人)	大卒・ 短大卒 (3135人)	ホワイト カラー (3065人)	ブルー カラー (1779人)	無職・ その他 (363人)
中学校まで+高校まで	9.3	15.2	1.8	17.2	1.8	3.4	15.9	12.7
専門学校・各種学校まで+ 短期大学まで	18.1	25.1	9.1	26.4	10.2	12.0	26.8	22.6
四年制大学まで+大学院まで	55.5	41.4	73.4	38.1	71.9	69.6	39.6	45.7
その他	7.3	6.7	8.1	6.4	8.2	7.2	6.9	9.9
無答不明	9.8	11.6	7.7	11.9	7.9	7.8	10.8	9.1

注) ホワイトカラーは「専門職」「管理職」「事務職」、ブルーカラーは「農林漁業」「農林漁業以外の自営業」「販売職・サービス職」「一般作業」「技能労働」を選んだ者。父親職業の無答不明は省略した。

## 3. 中学受験

16.1%が中学受験を予定し、20.4%が検討中。これらを合わせると36.5%が中学受験について考えている。小5、小6生では中学受験の予定は地方都市が4.9%、郡部が4.5%であるのに対して首都圏では19.5%と地域差が大きい。

### 小6生では2割が中学受験の予定

中学受験は母親の世代では非常にまれなケースであり、ほとんどの母親は自分自身が小学生の時は中学受験の可能性すら考えていなかったはずである。今回、中学受験の予定をたずねた結果(表3-8)では、16.1%が中学受験を「させる」と答え、20.4%が「まだ決めていない」と答えている。これらを合わせると36.5%が中学受験について考えていることになる。そして60.2%が「させない」と答えている。学年別では、小1生で受験を「させない」が54.6%で残りの4割強が中学受験について考えていることになる。また、小3生くらいから「まだ決めていない」が減少する。受験を「させる」と答えた割合をみると、小3生13.6%、小4生14.8%、小5生18.0%、小6生20.9%と上昇している。同じ表で、性別の受験予定の差はほとんどない。

次に、地域別に中学受験の予定(小5生と小6生)をたずねた結果(表3-9)をみると、中学受験の予定は地方都市が4.9%、

郡部が4.5%であるのに対して首都圏では19.5%と地域差が大きいことが分かる。

### 中学受験経験者の1割弱が 公立中学に進学

中学受験経験と現在通っている中学校の公立・私立別の関係のみてみよう。表3-10は公立中学と私立中学のそれぞれについて、生徒のうちどのくらいの割合が中学受験を経験しているかを示しているが、公立中学には2.6%の割合で「中学受験を経験した」生徒がいることが分かる。同じことを別の観点からみると、中学受験経験者の91.3%が希望通り私立中学に進学し、8.7%が公立中学に進学していることになる(表3-11)。かつての中学受験が狭き門だったころに比べると、中学受験に失敗して公立中学に進学する生徒は少なくなっている。とはいえ、中学受験を試みた子どものうち1割弱が私立に進学せずに公立に進学した生徒であるということは忘れてはならないだろう。

■表3-8 中学受験の予定(性別・学年別)

(%)

	全体 (3581人)	男子 (1816人)	女子 (1761人)	小1生 (577人)	小2生 (610人)	小3生 (612人)	小4生 (573人)	小5生 (604人)	小6生 (603人)
させる	16.1	17.1	15.0	13.9	15.4	13.6	14.8	18.0	20.9
させない	60.2	60.7	59.9	54.6	53.8	58.8	60.9	63.6	69.8
まだ決めていない	20.4	19.3	21.6	29.5	28.2	24.2	21.6	13.1	6.1
無答不明	3.2	2.9	3.5	2.1	2.6	3.4	2.6	5.3	3.2

注)「全体」には性別不明・学年不明の者も含む。サンプルは小1～小6生。

■表3-9 中学受験の予定(地域別)

(%)

	首都圏 (1207人)	地方都市 (325人)	郡部 (379人)
させる	19.5	4.9	4.5
させない	66.7	74.2	74.4
まだ決めていない	9.6	16.9	6.9
無答不明	4.2	4.0	14.2

注) サンプルは小5～小6生。

■表3-10 中学受験経験の有無(現在通っている中学の公私別)

(%)

	公立中学 (1935人)	私立中学 (571人)
中学受験をした	2.6	93.2
中学受験をしなかった	89.2	0.5
無答不明	8.2	6.3

注) サンプルは中1～中3生。

■表3-11 通学する中学校(中学受験経験の有無別)

(%)

	中学受験をした (583人)	中学受験をしなかった (1729人)
公立中学	8.7	99.8
私立中学	91.3	0.2

注) サンプルは中1～中3生。

## 4. 塾や習い事

### (1) 塾や習い事の経験率

塾や習い事の経験率は、首都圏93.5%、地方都市91.3%、郡部79.6%。首都圏では「スイミングスクール」59.9%、「定期的に教材が届く通信教育」53.6%の2つの経験率が50%を超え、4割の子どもが塾や習い事を5個以上経験している。

#### 首都圏ではほとんどの子どもが塾や習い事を経験

子どもに塾や習い事を経験させたことがある割合は、首都圏で93.5%、地方都市で91.3%と9割を超えているのに対して、郡部では79.6%にとどまっている(表3-12)。今回と1998年調査を比較(小3生以降で比較)すると、1998年調査が95.0%、2002年調査が94.6%でほとんど差がない。性別には、男子92.9%に対して女子94.4%と女子のほうがわずかに多い。

表3-13で、個々の塾や習い事の経験率をみると、高いものから順に、①「スイミングスクール」(59.9%)、②「定期的に教材が届く通信教育」(53.6%)の2つが50%を超え、断然多い。続いて③「楽器」(33.4%)、④「スポーツクラブ・体操教室」(29.7%)、⑤「受験のための塾」(28.5%)となっている。

性別では、男女ともに第1位が「スイミングスクール」、第2位が「定期的に教材が届く通信教育」で同じだが、男子では第3位が「地域のスポーツチーム」(40.5%)、第4位が「スポーツクラブ・体操教室」(35.0%)とスポーツ関係が上位になっている。これに対して女子では第3位に「楽器」(48.2%)、第8位に「音楽教室」(23.0%)と音楽関係の習い事の経験率が高くなっているほか、第5位の「習字」(28.8%)も高い割合になっている。

#### 首都圏では4割の子どもが塾や習い事を5個以上経験

表3-14は、今までに経験した塾や習い事の合計数をみたものであるが、首都圏では1~2個が20.6%、3~4個が32.3%、そして5個以上が40.4%にもなっている。5個以上経験している割合は地方都市の33.0%よりも7.4ポイント、郡部の10.9%よりも29.5ポイントも高くなっている。

表3-15で首都圏のみのデータに戻って学年別にみると、小1生の段階で88.7%が塾や習い事を経験済みである。そして、小4生が95.5%でほぼピークに達している。塾や習い事を「スポーツ系」(「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム)、「芸術系」(「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室)、「学習系」(「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師)の3つのタイプに分けると、「スポーツ系」は小6生80.4%でピークを迎え、「芸術系」は中1生53.1%で最高になり、「学習系」は小1生の段階ですでに56.5%あったのがその後も学年が上がるにつれて上がり続け、中3生91.4%まで伸び続ける。まとめると、「スポーツ系」は小4生まで、「芸術系」は中1生まで増え続け、「学習系」が中3生まで増え続ける。

■表3-12 塾や習い事の経験率(性別・地域別)

(%)

	1998年 (4475人)	2002年 (4896人)	全体 (6085人)	性別		地域別			
				男子 (3129人)	女子 (2948人)	首都圏 (6085人)	地方都市 (1438人)	郡部 (1518人)	全国全体 (9041人)
塾や習い事をしたことがある	95.0	94.6	93.5	92.9	94.4	93.5	91.3	79.6	90.8

注1) 「今までにやったことがあるもの」として18項目の選択肢のうち、いずれかに○をつけた者の割合。

注2) 1998年と2002年の比較は首都圏・小3～中3生のデータ、性別・地域別は小1～中3生のデータ。

■表3-13 今までに経験した塾や習い事(性別・地域別)

(%)

	全体 (6085人)	性別		地域別	
		男子 (3129人)	女子 (2948人)	地方都市 (1438人)	郡部 (1518人)
①スイミングスクール	59.9	①62.4	①57.3	47.3	28.4
②定期的に教材が届く通信教育	53.6	②52.5	②54.7	49.0	36.5
③楽器	33.4	⑧19.5	③48.2	30.6	21.7
④スポーツクラブ・体操教室	29.7	④35.0	⑦24.2	25.1	9.1
⑤受験のための塾	28.5	⑤31.8	⑥25.0	11.8	3.6
⑥英会話などの語学教室や個人レッスン	27.4	⑥25.5	④29.4	18.2	10.9
⑦地域のスポーツチーム	26.3	③40.5	11.4	22.8	20.6
⑧習字	23.0	17.5	⑤28.8	43.6	24.8
⑨計算・書きとりなどのプリント教材教室	19.9	⑦20.4	19.4	20.4	10.4
⑩音楽教室	16.5	10.4	⑧23.0	19.2	11.9
⑪児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	16.1	15.6	16.7	17.0	9.2
⑫補習塾	14.6	14.3	14.9	13.1	4.9
⑬受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	13.8	15.0	12.6	13.6	2.4
⑭絵画教室や造形教室	10.1	9.2	11.2	6.5	2.9
⑮バレエ・リトミック	10.0	3.4	16.9	6.1	2.4
⑯そろばん	8.4	7.2	9.6	14.2	19.8
⑰家庭教師	6.0	6.1	5.8	4.7	2.4
その他	7.3	7.5	7.0	5.9	2.4

注1) ○囲み数字は順位を示している。 注2) 複数回答。

■表3-14 今までに経験した塾と習い事の合計数(地域別)

(%)

	首都圏(6085人)	地方都市(1438人)	郡部(1518人)	全国全体(9041人)
0	4.6	7.4	17.8	7.3
1～2個	20.6	23.2	39.5	24.1
3～4個	32.3	34.9	29.1	32.2
5個以上	40.4	33.0	10.9	34.3
無答不明	2.1	1.6	2.8	2.1

注) 同じ種類を複数回経験しても1回として計算している。

■表3-15 塾や習い事の経験率(学年別)

(%)

	小1生 (577人)	小2生 (610人)	小3生 (612人)	小4生 (573人)	小5生 (604人)	小6生 (603人)	中1生 (858人)	中2生 (823人)	中3生 (823人)	全体 (6085人)
塾や習い事全体	88.7	89.3	92.8	95.5	92.4	94.7	94.5	96.1	95.7	93.5
スポーツ系	67.8	69.7	74.8	78.0	75.8	80.4	75.9	75.1	75.2	74.8
芸術系	36.9	41.0	42.0	47.3	43.5	48.9	53.1	49.9	51.9	46.7
学習系	56.5	64.9	66.7	70.0	70.0	71.8	84.0	86.3	91.4	75.1

注) 「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から最低1つ、「芸術系」は「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から最低1つ、「学習系」は「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師」から最低1つを選んだ割合。

## (2) 現在通っている塾や習い事

塾や習い事の現在の利用率（調査時点での利用率）は首都圏77.0%、地方都市81.3%、郡部65.4%であった。内容別には、「定期的に教材が届く通信教育」21.9%、「受験のための塾」15.9%、「補習塾」10.0%の利用率が高く、これら3つを合計すると47.8%になる。

### 小4生で85.0%の子どもが、現在、塾や習い事を利用

現在の利用率（調査時点で、塾や習い事を利用している割合）は予想外に高く、首都圏77.0%、地方都市81.3%、郡部65.4%であった。首都圏について学年別にみると（図3-2）、小1生で79.0%とこの段階で塾や習い事を利用している割合がおおよそ8割にまで達し、小4生で85.0%とピークになる。そのあとは小5生80.5%、小6生82.6%と8割台を保ったあと、中学ではいったん中1生65.0%と下がり、その後は中2生69.4%、中3生74.8%と高校入試に向けて再度上昇する。

### 高い「学習系」の塾や習い事の利用率

表3-16は現在の利用率を具体的にみたものである。「スポーツ系」の利用率が比較的高く、「スイミングスクール」（15.4%）、「スポーツクラブ・体操教室」（9.3%）、「地域のスポーツチーム」（12.6%）となっている。これらを合計すると37.3%になる。

また、「芸術系」では「楽器」（16.9%）が高い割合になっており、これに「音楽教室」（4.2%）、「絵画教室や造形教室」（1.9%）を加えると23.0%が「芸術系」の習い事をしている。

「学習系」では、「定期的に教材が届く通信教育」（21.9%）、「受験のための塾」（15.9%）、「補習塾」（10.0%）の3つのタイプの利用率が高く、合計で47.8%とおおよそ半数がこれらを利用中である。さらに、「計算・書きとりなどのプリント教材教室」（6.7%）、「家庭教師」（3.1%）を加えると、「学習系」の合計は57.6%になる。

その他では、「英会話などの語学教室や個

人レッスン」（13.4%）、「習字」（9.8%）の現在の利用率が高くなっている。

### 小学校高学年から増加する「学習系」の塾や習い事

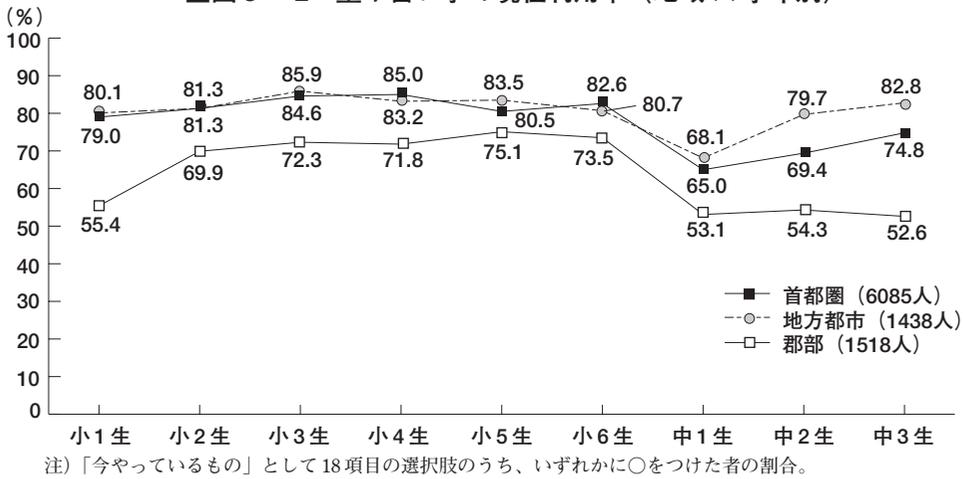
同じ表で性別では、「スポーツ系」の「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」で男子のほうが現在の利用率が高く、「芸術系」の「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」および「習字」で女子のほうが現在の利用率が高い。

学年別では、「スポーツ系」は中学に上がるるとほとんど通わなくなる。これは中学校に部活動があることが影響しているものと思われる。また、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」は小学校高学年になると、現在の利用率が急激に減少するのが特徴である。ピアノやバイオリンなどの「楽器」は小4生23.7%とピークを迎えるが、「スポーツ系」と異なり、中学生になっても1割前後が「楽器」を習っている。同じような傾向が「習字」や「英会話などの語学教室や個人レッスン」にもあてはまり、中学生になって利用率は減るものの「スポーツ系」ほどに急激に減少することはない。「学習系」では「定期的に教材が届く通信教育」と「計算・書きとりなどのプリント教材教室」が小4生くらいから減少しはじめ、代わりに「受験のための塾」「補習塾」「家庭教師」などが増加していく。ちなみに、学年ごとの利用率の順位を比較すると、小3生では第1位が「スイミングスクール」、第2位が「定期的に教材が届く通信教育」、第3位が「楽器」、第4位が「地域のスポーツチーム」とバラエティに富

んでいる。小6生では第1位が「地域のスポーツチーム」、第2位には「受験のための塾」が上位に進出し、第3位が「楽器」、第4位が「定期的に教材が届く通信教育」である。中3生では第1位が「受験のための塾」、第

2位が「定期的に教材が届く通信教育」、第3位が「補習塾」と第1位から第3位までが「学習系」で占められ、第4位が「楽器」であった。

■図3-2 塾や習い事の現在利用率(地域×学年別)



■表3-16 塾や習い事の現在利用率(性別・学年別)

	全体 (6085人)	性別		学年別								
		男子 (3129人)	女子 (2948人)	小1生 (577人)	小2生 (610人)	小3生 (612人)	小4生 (573人)	小5生 (604人)	小6生 (603人)	中1生 (858人)	中2生 (823人)	中3生 (823人)
スイミングスクール	15.4	16.5	14.3	32.1	30.5	31.2	28.4	18.4	11.8	1.6	1.3	0.6
スポーツクラブ・体操教室	9.3	11.7	6.6	17.5	17.5	15.7	11.7	11.6	9.6	2.8	2.3	2.6
地域のスポーツチーム	12.6	19.8	4.9	9.5	16.1	20.9	23.6	23.0	21.4	3.7	3.0	3.0
バレエ・リトミック	2.8	0.3	5.6	4.3	6.2	5.2	4.5	2.0	2.7	1.2	0.6	1.1
楽器	16.9	7.3	27.1	19.2	22.1	21.1	23.7	20.5	18.1	13.1	11.3	9.7
音楽教室	4.2	2.3	6.3	6.9	6.4	6.0	6.3	4.8	3.8	2.1	2.4	1.8
絵画教室や造形教室	1.9	1.4	2.3	4.0	3.0	2.6	2.8	1.8	2.7	0.6	0.7	0.2
習字	9.8	6.2	13.7	5.4	13.4	15.2	12.6	16.2	12.1	7.3	6.2	4.4
そろばん	2.9	2.8	3.0	3.6	4.4	4.6	4.5	5.3	4.3	0.9	0.6	0.4
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	2.0	1.6	2.5	1.7	2.6	3.4	3.8	2.6	3.0	1.2	0.5	0.6
英会話などの語学教室や個人レッスン	13.4	12.2	14.6	18.2	18.9	18.6	17.1	15.1	13.4	10.0	7.8	7.2
計算・書きとりなどのプリント教材教室	6.7	6.3	7.1	9.7	10.3	11.8	8.9	9.3	6.5	3.8	2.7	1.6
受験のための塾	15.9	16.3	15.5	0.9	2.8	5.2	11.3	16.7	19.6	13.9	22.0	40.2
補習塾	10.0	9.7	10.3	1.6	3.8	4.4	7.7	6.6	12.4	14.7	18.3	13.6
家庭教師	3.1	3.1	3.1	0.3	0.3	1.0	1.0	2.3	3.5	4.1	5.3	7.3
定期的に教材が届く通信教育	21.9	20.0	23.9	31.7	32.1	29.9	25.5	19.0	17.9	16.7	16.5	14.8
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	0.4	0.4	0.5	1.0	1.8	0.3	0.2	0.0	0.3	0.1	0.1	0.1
その他	4.8	4.9	4.7	5.7	8.0	7.2	8.2	5.1	4.0	3.6	2.7	1.3

注1) 複数回答。 注2) 「全体」には性別不明、学年不明が含まれている。

### (3) 習わせてよかった塾や習い事とその理由

最も習わせてよかったと思う塾や習い事は「スポーツ系」が選ばれる傾向が強く、合計で33.9%を占めている。よかった理由としては達成・上達・自信・健康などがあげられている。

#### 習わせてよかったと思う割合が高いのは「スポーツ系」の習い事

最も習わせてよかったと思う塾や習い事は、表3-17にあるように、第1位が「スイミングスクール」(19.1%)、第2位が「地域のスポーツチーム」(9.9%)、第3位が「楽器」(8.0%)、第4位が「スポーツクラブ・体操教室」(4.9%)であった。「スポーツ系」が選ばれる傾向が強く、3つの合計で33.9%を占めている。また、表3-18で、小1生、小6生、中3生を取り出し、学年別に最もよかったと思う塾や習い事をみると、「スイミングスクール」が小1生で21.9%だったのが、小6生では17.9%、中3生では16.9%と減少し、「スポーツクラブ・体操教室」も同じく7.6%→4.9%→2.8%と減少する。「地域のスポーツチーム」も4.5%→13.1%→9.1%と小1生から小6生にかけていったん増加するが、そのあと減少する。「スポーツ系」は低い学年の母親のほうが選ぶ傾向がある。学年が高い母親が選ぶ傾向があるのは、「楽器」「習字」「受験のための塾」であった。

#### 習わせてよかった理由は達成・上達・自信・健康

表3-19で、習わせて最もよかったと思うものを選んだ理由をたずねたところ、多いほうから順に「今までできなかったことができるようになった」(40.1%)、「塾や習い事をしていることが得意になった」(33.9%)、「自

信がついた、積極的になった」(30.7%)、「身体が丈夫になった」(26.9%)などの達成・上達・自信・健康にかかわる理由が多く選ばれている。性別では、男子は女子よりも「身体が丈夫になった」「友だちが増えた」「礼儀正しくなった」が多く、女子は男子よりも「情操面にいい影響があった」「将来的に趣味となるようなものが見つけられた」「発表会などで達成感を味わった」が多くなっている。

最後に表3-20で、最も習わせてよかったものとして選ばれた塾や習い事のタイプとそれを選んだ理由の関係をみる。「スポーツ系」を選んだ母親はその理由として、「身体が丈夫になった」「今までできなかったことができるようになった」「塾や習い事できていることが得意になった」「自信がついた、積極的になった」「友だちが増えた」など健康・達成・上達・自信・友だちを選ぶ割合が高い。これに対して、「芸術系」を選んだ母親は「発表会などで達成感を味わった」「情操面にいい影響があった」「将来的に趣味となるようなものが見つけられた」「今までできなかったことができるようになった」など達成・情操・趣味を上位の理由にあげている。「学習系」を選んだ母親は「学習習慣が身についた」「学校生活で役に立った」「今までできなかったことができるようになった」「集中力・精神力などがついた」など学校や学習と結びついた理由をあげている。

■表3-17 習わせてよかったと思う塾や習い事(性別)

(%)

	全体 (5692人)	男子 (2907人)	女子 (2782人)		全体 (5692人)	男子 (2907人)	女子 (2782人)
スイミングスクール	19.1	20.6	17.4	定期的に教材が届く通信教育	2.4	2.4	2.3
地域のスポーツチーム	9.9	16.3	3.2	バレエ・リトミック	2.0	0.2	3.8
楽器	8.0	3.1	13.0	補習塾	1.7	1.5	1.8
スポーツクラブ・体操教室	4.9	6.7	3.1	そろばん	1.6	1.5	1.8
受験のための塾	4.4	5.8	2.9	絵画教室や造形教室	1.5	1.2	1.8
習字	4.2	2.5	6.1	児童館など公共施設での 自治体主催の教室・サークル	0.9	0.9	1.0
英会話などの語学教室 や個人レッスン	4.1	3.3	4.9	受験が目的ではない幼児 教室やプレイルーム	0.9	1.0	0.8
計算・書きとりなどの プリント教材教室	2.9	2.7	3.0	家庭教師	0.8	0.8	0.9
音楽教室	2.6	1.3	3.9	その他	2.9	3.2	2.6

注1)「全体」には性別不明も含む。ただし、塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ(266人)」と答えた者と「無答不明(127人)」は計算から除外した。

注2) 18項目から1つ選択。

■表3-18 習わせてよかったと思う塾や習い事(学年別)

(%)

	小1生 (512人)	小6生 (571人)	中3生 (788人)		小1生 (512人)	小6生 (571人)	中3生 (788人)
スイミングスクール	21.9	17.9	16.9	児童館など公共施設での 自治体主催の教室・サークル	2.1	1.2	0.8
スポーツクラブ・体操教室	7.6	4.9	2.8	絵画教室や造形教室	2.0	1.6	0.5
楽器	6.4	8.1	8.6	そろばん	1.4	1.9	1.8
地域のスポーツチーム	4.5	13.1	9.1	習字	1.2	4.4	4.4
定期的に教材が届く通信教育	4.3	1.8	1.8	受験が目的ではない幼児 教室やプレイルーム	1.2	0.4	0.4
音楽教室	3.9	2.5	2.3	受験のための塾	0.8	2.8	9.3
計算・書きとりなどの プリント教材教室	3.9	3.2	2.5	補習塾	0.2	1.9	2.5
英会話などの語学教室 や個人レッスン	3.7	4.4	4.4	家庭教師	0.0	0.4	1.9
バレエ・リトミック	2.3	1.9	1.4	その他	3.7	2.5	1.8

注) 18項目から1つ選択。

■表3-19 習わせてよかったと思う理由(性別・学年別)

(%)

	全体 (5692人)	性別		学年別		
		男子 (2907人)	女子 (2782人)	小1生 (512人)	小6生 (571人)	中3生 (788人)
今までできなかったことができるようになった	40.1	40.7	39.3	48.4	39.1	32.2
塾や習い事できていることが得意になった	33.9	34.4	33.5	26.4	38.2	31.5
自信がついた、積極的になった	30.7	30.9	30.4	32.2	37.1	26.9
身体が丈夫になった	26.9	32.6	20.9	25.0	31.7	24.0
友だちが増えた	25.3	29.6	20.8	22.9	30.3	20.9
集中力・精神力などがついた	24.8	26.2	23.4	21.9	31.0	24.2
学校生活で役に立った	19.9	19.8	20.0	10.9	23.6	24.4
情操面にいい影響があった	19.6	17.7	21.5	19.1	21.4	19.3
将来的に趣味となるようなものが見つけられた	17.5	14.9	20.1	13.7	21.4	18.3
発表会などで達成感を味わった	17.0	8.9	25.4	15.2	20.1	15.0
家族のコミュニケーションの機会が増えた	14.4	16.3	12.5	10.4	17.0	13.7
友だちに自慢できるものができた	12.6	13.2	12.0	13.3	16.1	9.5
学習習慣が身についた	11.5	11.3	11.6	11.3	13.1	13.7
学校の行事で活躍する場ができた	9.5	8.0	11.0	3.9	12.4	10.7
礼儀正しくなった	8.7	11.2	6.0	5.5	9.8	8.9
志望校に合格した	2.7	3.9	1.4	1.4	1.6	4.1

注1)「全体」には性別不明も含む。ただし、塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ(266人)」と答えた者と「無答不明(127人)」は計算から除外した。

注2) 複数回答。

表3-20 習わせてよかったと思う理由（最もよかった塾や習い事別）

(%)

	最もよかったもの			全体 (5692人)
	スポーツ系 (1931人)	芸術系 (689人)	学習系 (692人)	
今までできなかったことができるようになった	② 52.0	④ 37.0	③ 31.9	40.1
塾や習い事でしていることが得意になった	③ 42.8	⑤ 30.3	⑥ 23.3	33.9
自信がついた、積極的になった	④ 35.7	⑥ 25.4	⑤ 26.6	30.7
身体が丈夫になった	① 55.6	2.2	1.9	26.9
友だちが増えた	⑤ 35.6	11.2	⑦ 15.9	25.3
集中力・精神力などがついた	⑥ 23.2	⑦ 23.8	④ 30.2	24.8
学校生活で役に立った	17.3	10.4	② 44.4	19.9
情操面にいい影響があった	16.2	② 45.4	4.2	19.6
将来的に興味となるようなものが見つけられた	16.1	③ 43.0	1.2	17.5
発表会などで達成感を味わった	7.9	① 50.8	1.7	17.0
家族のコミュニケーションの機会が増えた	⑦ 18.0	17.6	6.4	14.4
友だちに自慢できるものができた	16.7	13.1	4.8	12.6
学習習慣が身についた	2.0	3.3	① 47.8	11.5
学校の行事で活躍する場ができた	9.9	21.0	0.7	9.5
礼儀正しくなった	11.2	3.6	3.2	8.7
志望校に合格した	1.6	0.0	11.0	2.7

注1) 「スポーツ系」は「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」から、「芸術系」は「楽器」「音楽教室」「絵画教室や造形教室」から、「学習系」は「定期的に教材が届く通信教育」「受験のための塾」「補習塾」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「家庭教師」から最もさせてよかった習い事を選んだ者。

注2) 「全体」には、その他の塾や習い事を選択した者も含まれている。ただし、塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ(266人)」と答えた者と「無答不明(127人)」は計算から除外した。

注3) ○囲み数字は順位を示している。

## 5. 教育費

24.6%の家庭が「2万円以上4万円未満」、8.3%の家庭が「4万円以上」の教育費を、毎月、支出している。塾や習い事にかかる費用は高額になっている。小6生の受験予定の家庭ではおよそ7割が「4万円以上」の教育費を支出している。

### 高額な教育費

表3-21は、子どもを塾や習い事に通わせている母親に対して、毎月の費用をたずねた結果である。この表で、38.1%の家庭が「1万円未満」、25.9%が「1万円以上2万円未満」の費用であるが、これに対して、24.6%が「2万円以上4万円未満」、8.3%が「4万円以上」としている。「2万円以上」を合計すると32.9%になる。1998年調査と2002年調査の比較(小3生以上)では、経済状況の悪化が原因なのか「1万円未満」が2.1ポイントの増加になっている。性別では、男子のほうが「1万円未満」の割合が大きい。これは男子に「スポーツ系」の習い事が多く、女子に「芸術系」の習い事が多いことが影響しているものと考えられる。

### 受験予定の小6生の家庭では

「6万円以上」が35.0%

次に表3-22で、「4万円以上」の割合が

大きくなっているのは、小5生11.9%、小6生18.2%、中3生16.3%で、これらの学年では進学塾、補習塾を利用する割合が高くなるためと考えられる。そこで、表3-23で小学生を対象に中学受験と教育費の関係を確かめると、「4万円以上」支出している割合は、小1生の段階で受験予定のある家庭は10.3%、ない家庭は0.0%。小3生で同じく18.3%対0.0%、小5生で50.9%対0.6%、小6生では70.7%対2.3%になっている。このように受験を予定している家庭では、小5生で5割、小6生では7割が「4万円以上」の教育費を支出している。小6生に限って、もう少し詳細に教育費をみると(表3-24)、受験予定の家庭では「4万円以上5万円未満」が25.2%、「5万円以上6万円未満」が10.6%、そして「6万円以上」が35.0%にもなっている。

■表3-21 教育費(経年比較・性別)

(%)

	1998年 (4252人)	2002年 (4634人)	全体 (5692人)	性別	
				男子 (2907人)	女子 (2782人)
1万円未満	34.4	36.5	38.1	42.2	34.0
1万円以上2万円未満	24.9	24.1	25.9	23.0	28.8
2万円以上4万円未満	28.0	26.7	24.6	23.8	25.4
4万円以上	9.5	9.6	8.3	8.0	8.7
無答不明	3.2	3.2	3.1	3.0	3.2

注1) 1998年と2002年の比較は小3～中3生、全体および性別は小1～中3生のデータ。「全体」には性別不明の者も含まれる。  
注2) 塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ」と答えた者と無答不明は計算から除外した。

■表3-22 教育費（学年別）

(%)

	小1生 (512人)	小2生 (545人)	小3生 (568人)	小4生 (547人)	小5生 (558人)	小6生 (571人)	中1生 (811人)	中2生 (791人)	中3生 (788人)
1万円未満	49.2	41.8	43.3	39.5	37.2	39.1	41.4	35.2	23.1
1万円以上2万円未満	33.0	34.3	34.9	34.5	30.4	24.6	22.7	19.0	10.5
2万円以上4万円未満	13.1	17.7	15.7	17.6	16.9	14.9	26.9	35.5	47.1
4万円以上	2.0	4.2	3.9	5.8	11.9	18.2	5.3	6.3	16.3
無答不明	2.7	2.0	2.3	2.6	3.6	3.3	3.7	3.9	2.9

注) 塾や習い事の経験を問う質問に「いいえ(266人)」と答えた者と「無答不明(127人)」は計算から除外した。また、学年不明(1人)は表から省略した。

■表3-23 教育費に「4万円以上」かけている家庭の割合（学年×中学受験予定別）

(%)

	中学受験			全体
	させる	させない	まだ決めていない	
小1生	10.3	0.0	1.3	2.0
小2生	13.3	0.4	4.9	4.2
小3生	18.3	0.0	4.1	3.9
小4生	25.9	0.3	6.6	5.8
小5生	50.9	0.6	6.6	11.9
小6生	70.7	2.3	10.8	18.2

注1) サンプルは、小1～小6生の塾や習い事の経験者3301人。

注2) 数値は教育費に「4万円以上」かけている割合。

注3) 「全体」には中学受験予定の無答不明を含む。

■表3-24 小6生の教育費（中学受験予定別）

(%)

	中学受験			全体 (571人)
	させる (123人)	させない (396人)	まだ決めていない (37人)	
2万円未満	6.5	81.8	62.2	63.7
2万円以上3万円未満	5.7	10.1	16.2	9.6
3万円以上4万円未満	14.6	2.0	8.1	5.3
4万円以上5万円未満	25.2	1.8	5.4	7.2
5万円以上6万円未満	10.6	0.3	0.0	2.6
6万円以上	35.0	0.3	5.4	8.4
無答不明	2.4	3.8	2.7	3.3

注) 「全体」には中学受験予定の無答不明を含む。